

書評…小林啓治著『戦争の日本史²¹ 総力戦とデモクラシー ―第一次世界大戦・シベリア干渉戦争』

本書は、『戦争の日本史』シリーズの第二二巻として、吉川弘文館から二〇〇八年に出版されたものである。本書への本格的な批評に入る前に、シリーズ全体を貫徹するテーマを確認しておきたい。本シリーズ「刊行の言葉」には、次のようにある。「二一世紀をむかえた国際社会は、平和や自由な社会が訪れるどころか、人類を絶滅させかねないハイテク兵器や大量破壊兵器による大規模な武力衝突の危険性を次々と生み出しています。また、過去百年は「戦争の世紀」といわれるほど、人類史上最悪な戦争の連続でした。戦争は残酷で悲惨な結果をもたらすものであることを誰もが認識しているにもかかわらず、なぜ人類の知恵と知識によりさまざまな矛盾を解決できないのでしょうか。(中略)戦後における日本史研究を振り返りますと、政治史・社会経済史をはじめ民衆生活史としての日常史に重点をおいて進展してきましたが、日常の対極にある非日常としての戦争史や軍事史の研究は最も遅れた分野のように見受けられます。しかしながら、現在の世界状況を鑑みると、日本史研究においても戦争や軍事の問題を正面から採り上げなければならない時期にきているものと考えます。」

この「刊行の言葉」については、各研究分野の専門家からすれば、史学史的な位置づけなどをめぐって、若干の異論もあろうが、少なくとも、次の点に関しては、概ねご了承を頂けるのではないだろうか。それはすなわち、本シリーズが、極めて重要かつ、根源的な問題意識から出発し、歴史学(とりわけ日本史学)の現代的意義を模索しようとしているものである、という点である。また、評者が、本シリーズから就中本書を批評の遡上に載せんとする理由もまた、ここにある。

そして、こうしたテーマに基づきつつ、第一次世界大戦についての概説書の表題として『総力戦とデモクラシー』が掲げられ、しかも、公文書中心主義的な手法に対しては一定の距離感を保っている小林啓治氏の名を伴って、本書が戦争史に新たに参入することについては、近代日本における思想の問題を、帝国主義とそれに対する平和思想の枠組みで捉えようとする評者にとっても非常に実用的かつ刺激的なものであると考えられる。通例に倣って、というわけではないが、本書の特性を明示するために、本書の構成を確認しておこう。

プロローグ 二〇世紀の起点としての第一次世界大戦

I 戦争の勃発

- 1 戦前のヨーロッパ世界
- 2 戦争の起源

II 日本の参戦

- 1 中国をめぐる日本外交
- 2 青島戦争と負の遺産

III 『欧州戦争実記』と戦争報道

- 1 博文館『欧州戦争実記』の刊行
- 2 青島戦争と欧州戦争 ―戦争第一期

- 3 立体化した戦争と帝国の動員 ―戦争第二期
 - 4 新兵器によって変わる戦争と総力戦 ―戦争第三期
- IV 「戦いを超えて」 ―ロマン・ロランと反戦の精神

- 1 戦争下の知識人
- 2 ロランの反戦を支えた精神・思想
- 3 ロランの思想の変化

V 戦争目的・講和条件をめぐる政治 ―ロシア革命のインパクト

- 1 アメリカの参戦
- 2 ロシア革命と戦争目的、戦後構想

VI 二つの講和―ヴェルサイユ講和と「人間的インターナショナル」

- 1 革命への干渉戦争
 - 2 講和と積み残された問題
 - 3 「人間的インターナショナル」 ―真の講和へ
- エピローグ 終わらぬ苦悩と新たな行動

ご確認していただけたであろうか。「異例とも思えるほど日本史の枠をはずしてしまった。〔七頁〕」とは、著者自身による本書に対する評価であるが、なるほど、そうした異質性は、本書の構成を一見すれば、読者にもただちに理解されるものでもあろう。しかし、第一次世界大戦という、ヨーロッパを主戦場とした戦争を、日本の戦争史の枠組みで、しかも『総力戦とデモクラシー』というテーマで捉えようとすること自体が、非常に困難な作業であることは、評者にも容易に理解できる。しかし、その上で、著者が、第一次世界大戦史と日本の戦争史との結合を企図した結果が本書の構成そのものであるうし、また、本書の特色もそこにまたよく現れている、と評者は考える。

特に、着目すべき第一の点は、第三章の『欧州戦争実記』と戦争報道』であろう。ここでは、マスメディアを分析素材として、いかなる形で第一次世界大戦が日本社会に影響を及ぼしたか、ということを明らかにしているが、ここで重要だと思われることは、総力戦としての第一次世界大戦を報道したマスメディアを通して、国民国家的なデモクラシーの形成過程と、その臨界点を明らかにしている、ということである。それはすなわち、国民国家的なデモクラシーと総力戦体制とが結合する契機が、第一次世界大戦という日本国外の戦争報道を通じて形成されてきたことを明らかにするものであり、本書の表題である『総力戦とデモクラシー』の関係性を考える意味でも、実に重要な箇所であろう。

そして、さらに着目しなければならない第二点は、第四章の「戦いを超えて」―ロマン・ロランと反戦の精神』である。著者は、ロマン・ロランという文学者の言説を分析素材に、当該期の反戦思想のネットワーク的展開を、「人間的インターナショナル」として位置づけ、第VI章においてその可能性について論じている。それはすなわち、国民国家を最上位の枠組みとしたデモクラシー⇨総力戦体制の臨界点に対峙するものとして、インターナショナルなデモクラシーのあり方を位置づけ、前者のあり方を超克しうるものとして論じているのである。本書のこの展開は、国民国家的な『総力戦とデモクラシー』の臨界点と、そのブレイクスルーポイントを明らかにしたという意味において、なによりも重要な論点として強調せねばならないだろう。（ちなみに、本稿に与えられた紙幅は非常に限定的なもので

あるので、本書の構成に完全に即した形で精緻な批評については、是非ともこちらの成果を参照されることを、本書評の読者にはお勧めするものである。」

さて、そうはいっても評者の考えるところ、本書が日本史の概説書としては異質なものであることは、否めないものである。しかし、そうした異質性は本書の価値を減ずるどころか、むしろ高めるものである。なるほど、一般的な概説書とはほど遠い叙述がなされている本書は、第一次世界大戦についての入門書とは言い難い性格を有している。が、そうしたものを必要とするのであれば、既存の概説書を参照すれば事足りるだけのことであるし、むしろ、本書の成果は、著者自身のこれまでの研究成果と問題意識とが結晶化した、独自の視座と、それに基づいた方法的な可能性にこそあるのである。

近代日本における知識人の国際秩序認識に、これまで研究の焦点を当ててきた著者は、第一次世界大戦を契機とする世界の変動を、総力戦体制の萌芽、および、その現代との連続性。という単線的なラインのみではなく、複線的なラインにおいて把握しようとしている。それはすなわち、第一次世界大戦以降の一九二〇―三〇年代を、国際秩序の変動期として、日本を主たる考察対象に据え、戦争と平和、国家の相対化と全体主義、帝国主義と反帝国主義などの対抗軸を複合的に見ることによつて、現代世界を規定する枠組みがいかに形成されたか、ということに着目することであり、さらに、本書において著者が採用したアプローチの仕方について、評者が特に注目する点は、さきにも述べてきたような、歴史の動態的把握。という以外に形容の仕様のない方法論である。

さて、ここで、突然ではあるが、歴史学という学の、原初地点へと立ち返ってみよう。歴史学とは、過去に起きた出来事についての学である。この、あまりにも同語反復的で自明にすぎることをあえて言わなければならないのは、この学問に付随せざるを得ないある種の性質について、再確認するためである。過去に起きた出来事を、現在の視点から再構成する歴史学は、それが対象とする出来事の善と悪とにかかわらず、それらの来歴を解き明かし、それぞれの出来事の発生に合理的な理由を付与するものである。このことは、歴史学の最大のセールス・ポイントである。と同時に、最大のウィーク・ポイントともなりうる。かつて発生した出来事そのものを変化させることは不可能であることは、これまた自明の事実であり、そのことは必然的に、われわれに次のことを要請する。すなわち、一見、どれほど悪にみえる出来事にも、それが発生したからには一定の理由が存在するのだから、われわれは、その悪についても、一旦は合理化して引き受けざるを得ない。このことは、しばしば歴史学が自虐的である、と揶揄されることとは無関係ではないし、更にいえば、過去の出来事の合理性に耐えかねて、それに正当性までもを付与しようとする志向が存在することや、はたまた、過去の出来事そのものを抹消しようとするある種の知的不誠実も、基本的には、この円環の内部で発生するものであると考えられる。

過去はわれわれが紐解こうとする以前に、とつこの間に完結しているし、また、そうでなければ、歴史学の対象ともなり得ない。この、どこをどう足掻いても完結せざるをえない作業、すなわち、現在から過去を再構成するという作業が必然的に内包し、また、永遠に切除することも出来ないであろう一種の閉塞性は、即座にわれわれに次の問いとなつて襲来するであろう。「過去の出来事を再構成することによつて、現在までを俯瞰しようとしても、そこから将来へのパス・ペクティブは提供しうるのか。」と。あるいは、もっと直接的な問いが発せられるかもしれない。「歴史学に存在意義はあるのか。」と。

しかし、この「過去に起きた出来事についての学」であるがゆえに生む難問を前にして、われわれは立ちすくむ必要があるだろうか。評者は、ないと考える。あまりにも同語反復的な、自明的な議論は、確かに強固ではあるが、同時に異常なまでの脆さをもつものでもある。難問へのブレイクスルーポイントとして、われわれは、こうした問いをこそ発すべきなのではないか。果たして、過去は完結しているのか、と。われわれは未規定な現在を規定しようとして過去を参照するが、過去は、そうした未規定な現在の視線から、未規定的に規定される。すなわち、どちらも動いていて、相互に影響的で、相互に浸食する可能性すらもつ思考運動であり、両者の不可避的な揺れ（物理学の素養がある人は量子力学の理論を想起してくれて良い）は、すべての未規定性へと終着するのではないか。そうしたパスpekティブがもし可能になるとすれば、それはおそらく、未来への余白を大いにわれわれに残した可能性のパスpekティブであり、その中において、歴史学という学は、時空間を超越し、さまざまな過去―現在―未来を描くことの出来る羅針盤であると同時に、自由自在なタイムマシンとなっていないはずだ。

こうした、歴史学の原初地点をわざわざ召喚してまで、ここで評者が強調したいことは、本書がそうしたパスpekティブやメソッドを開拓するための端緒となりうる、という点にある。著者はいみじくもプロローグでこう述べる。「反戦思想や運動が軽視されるのは、おそらくそれが世界政治の現実と与えている影響を実証することが容易でないことにも原因がある。歴史研究や政治研究が利用しやすい史料は圧倒的に国家機関によるものが多いために、そうした史料状況に規定されて、私たちは知らず知らずのうちに国家を通して世界を見る一種の国家主義にとらわれてしまっているということはないだろうか。〔八頁〕」著者はこう述べ、ロマン・ロランの反戦思想に注目することにより、そうした思想のネットワーク的な存在を、国家中心の（あるいは公文書中心主義的な）歴史に対法的に配置したわけだが、そこで明らかにされたことは、反戦思想もまた、現実世界との接点を常に有している。ということであり、なおかつそれ以上に重要だと思われることは、国民国家ⅡデモクラシーⅡ総力戦体制といった、一連のラインの歴史的限界を描きつつも、そのラインと並行的に、潜勢力として反戦思想のネットワークを位置づけ、その顕在化の契機を、動態的に提示してみせようとした点にこそある。これは、現代における平和思想の問題についても、精力的に取り組んできた著者ならではの成果であるとともに、歴史学を、先に述べた難問を突破するための、可能性をも内包した学とするような、壮大な射程を有するものである。歴史学の未来に向けて。あるいは、歴史学の、未来世界そのものへのアクセサビリティの回復へと向けて。そして、平和な世界の、未来における顕在化の可能性に至るまで。本書は広大な可能性をわれわれに魅せてくれている。

さて、評者の問題関心に即したかたちで、ここまで評価を述べてきた。とはいえ、本書については、いくつかの問題点についても指摘せねばなるまい。一つには、分析視座が第一次世界大戦「以降」に多くを割かれていること、である。このことは、一方では、現代にまで連続する平和思想の流れを（国民国家の問題の連続性などとともに）明確にしたが、他方では、その流れは、第一次世界大戦を契機とするものとして把握されている。本書は、ロマン・ロランを中心とした共時的な思想と思想との連関、思想と出来事との連関を明らかにし、そこから現在をも見通しているが、よく知られているように、日本における平和思想の流れは、福沢諭吉的な文明論を起点に世界政府を構想した植木枝盛の存在も無視は

出来ない。また、ドストエフスキーと共振し、日露戦争時に非戦思想を展開した幸徳秋水・木下尚江・内村鑑三らの流れも重要であろう。こうしたいわゆる縦軸の流れを踏まえることで、第一次世界大戦以降の反戦思想の意義や特質も、また明瞭になるのではないか。更に、筆者が着目する思想は、たとえば恒藤恭や大澤章ら法学者の言説があげられるが、これらは総じて、個人と国家、国家と世界という大きな枠組みでそれぞれの位相が論じられたものである。こうした、国家を媒介としつつも、個人の自由をそれより高次の世界へと結びつける議論は、社会主義やアナキズム、あるいは、哲学や文学における当該期の世界認識とどのような位置関係にあったのであろうか。その可能性や歴史的限界について迫るためにも、当該期の知的編成の再構成と、そこでの平和思想の定位作業は、今後の研究の進展を俟ちたいところである。そうした作業は、また、潜勢力としての平和思想のネットワーク的展開の、現代（あるいは未来）における顕在化の契機をめぐって、非常に重要な作業になるであろうことは想像に難くない。

さて、ここまで評者の浅学非才を省みず、些末な議論を展開してきたが、先に述べた本書の意義からすれば、いずれも望蜀の言に近い。むしろ、本書が提起した提起する論点や、方法的な可能性は、評者をも含めて、近代史ならびに思想史研究そのものに携わるものにとっても、その周辺領域にあるものにとっても、実に示唆的なものであり、なおかつ、反戦思想をめぐって展開される議論の強度と精度とは、専門の内外を問わず、現代的な提起を多分に含んだものである。広く味読されることを希望してやまない。

付記…先にも述べたとおり、原佑介氏の精緻な批評なくして、評者のこの批評は存在しえなかった。氏と仕事をともに出来たことと、そこで得られた知的刺激に、最大限の感謝と敬意とを表したい。

²¹ 原佑介「書評…小林啓治著『戦争の日本史』」総力戦とデモクラシー―第一次世界大戦・シベリア干渉戦争』、『洛北史学』第一号、二〇〇九年。

²² 『国際秩序の形成と近代日本』、吉川弘文館、二〇〇二年。

²³ 「現代社会論と九条―憲法問題を現代的に議論するための諸前提―」、『歴史評論』第六七一号、二〇〇六年三月。